

解題・翻刻

## 高橋徳松氏の軍事郵便について

佐藤憲一

### 1 高橋徳松氏の略歴

高橋徳松氏は明治四十三（一九一〇年）岩手県和賀郡藤根村（現在の北上市和賀町藤根）に農家の四男として生まれた。

兄弟は男六人（長男徳孝、二男徳美、三男徳三郎、四男徳松、五男福松）、女五人の十一人で、父徳太郎は当時三ヘクタール位の田圃を所有する大きな百姓であった。作男を使って農業をしていたが、教育にも熱心で、長男の徳孝は岩手師範学校に学び、徳松氏も小学校高等科を卒業した。

徳松氏が弘前歩兵第三十一聯隊機関銃隊第五班に入隊したのは昭和六（一九三二）年一月十日である。

満洲事変勃発とともに、現役兵として同年十一月十四日満洲へ出征。満洲派遣軍歩兵第三十一聯隊第二機関銃中隊属し同月十七日韓国の釜山に上陸、二十日に奉天駅に到着した。十二月に上等兵となっている。

昭和七年から八年にかけて、齊々吟爾・吟爾浜・満州里・海倫・克山・莊河・大狐山・錦州・義州・興城・朝陽寺・山海関・九門口を転戦した。この間、八年一月に乘馬隊へ一時編入、二月に第二機関銃中隊へ復帰し第二分隊長を命ぜられている。また、八月五日十四日の戦いで負傷、入院している。

昭和八年十二月二十六日、歩兵伍長で除隊。除隊後も満洲に留まり、満鉄に入社。満鉄自警隊に勤務した。

昭和二十九年頃日本へ引き揚げ、藤根村にも一カ月程滞在したが、その後、妻の出身地である山口県へ移住。間もなく妻を亡くし、再婚して

長野県に住み、昭和五十四（一九七九）年そこで亡くなった（以上、徳松氏の軍歴を除く、経歴については、長兄徳孝氏の娘に当たる高橋美子さん——北上市和賀町岩崎に在住——のご教示による）。

### 2 高橋徳松氏の軍事郵便

今回翻刻した徳松氏の軍事郵便は全部で四九通。これを編年で整理したのが別紙「一覧表」である。

編年に当たっては、日付と消印に依ったが、無い場合は内容から推定した。発信時の所属は郵便に記載通りである。形式ははがきと封書に分類し、軍事郵便には◎を付した。内容欄には、参考のため適宜要約と抜粋文言を記した。なお、同郷の出征兵士の名前については『真友』23号（昭和六年四月刊行）を参考にした。

四九通は、昭和六年一月の徳松氏の入隊に始まり、出征、転戦、除隊、そして除隊後の満鉄勤務（昭和十二年七月まで）となっている。この間、六年半。入隊（入営）から派遣、着任、任務に至る心境の変化——農民から徐々に兵士となっていく過程——をたどることが出来る。

また、村の年中行事・農作業・留守家族・村の後輩たち（青年学校）など、郵便には故郷、家族への思い——望郷の念——が綴られている。故郷と自分をつなぐ架け橋として、『真友』への期待は大きかったようだ。最新の情報を知らせてくれる「郷土の新報」と評価している。他に『和賀新聞』の送付も楽しみだったようである。

このほか、中国人に対する意識（差別、同情など）や郵便の検閲などの記事も注目される。

### 3 翻刻 49通の軍事郵便

1【はがき表】

岩手県和賀郡藤根村

後藤

高橋 峯次郎様

【はがき裏】

拝啓 時下冬冷之御、御尊家皆様益々御清栄之段、奉賀候。

御地在働中は一方ならざる御世話様に相成、尚ほ今回の入営に際しては種々御厄介に相成り、其の上多大の御饒別を賜り、尚ほ遠路態々御見送り被下、誠に有難く、厚く御礼申上候。

本日無事表記の中隊に入隊仕り候。此の上は一意専心軍務に勉励し、御厚意の萬分の一も報ゆる覚悟に有之候間、御安心被下候。不在中は、宜敷御援助被下候。先づは取敢ず御礼申上ると共、<sup>(に脱カ)</sup>入隊報知まで、如斯御座候。敬具。

(昭和六年)  
一月十日 弘前歩兵第三十一聯隊機関銃

隊第五班

高橋 徳松

2 【はがき表】

岩手縣和賀郡藤根村

大字後藤

高橋 峯次郎様

【はがき裏】

拝啓 時下冬冷の候、御尊家皆様益々御清栄之段、奉賀候。

御地在中は一方ならざる御世話様に相成、尚ほ今回の入営に際しては種々御厄介に成り、其の上多大の御饒別を賜り、尚ほ遠路態々御見送り被下、誠に有難く、厚く御礼申上候。

本日無事表記の中隊に入隊仕り候。此の上は一意専心軍務に勉励し、御厚意の萬分の一も報ゆる覚悟に有之候間、御安心被下候。不在中は宜敷く御援助被下候、先づは取敢ず御礼申上ると共に、入隊報知まで如斯御

座候。敬具。

(昭和六年)  
一月十日 弘前歩兵第三十一聯隊機関銃隊第五班

高橋 徳松

3 【はがき表】

岩手縣和賀郡藤根村

後藤

高橋 峯次郎様

弘前歩三一 キノ五

高橋 徳松

【はがき裏】

唯今、御親切ニ御葉書、正ニ拝読仕リマシタ。深く御礼申上ゲマス。

赴ニ依リ当五班ニハ青訓終了生四名有之、<sup>(願の誤カ)</sup>檢定額ル難問題ノ由、承リ居リマス

ガ、格別ニモアラス。歩哨ノ動作、斥候実施歩速ノ目則、<sup>(測カ)</sup>各個教練、学科ハ師団ノ編成、兵科ノ識別、四大節、其他些少ノ問題ニ二三有之マシタ由ニ聞キ居リマス。仲々猛烈競争デ辛イ所モアリマスガ、<sup>(カ)</sup>赴味モ徐々ニ出来テ来マシタ。立派ニ務メマスガ、階級タケハ問題ニシナイデ下サイ。精神ハ上下相經タル所ガナイト思ヒマス。デモ必ズヤリマス。

ドウカ村ノタメ、先生大イニ指導シテ下サイ。ソレカラ指導員ハ新シイ人ヲ好ミマス。ソーシテ下サイ。

雪ハ藤根ヨリアリマス。

(昭和六年一月)

4 【はがき表】

岩手縣和賀郡藤根村

字後藤小学校

高橋 峯次郎様

弘前歩三キノ五

高橋 徳松

【はがき裏】

漸やく春めいて参りました。

先生お変わり有りませんか、お尋ね申します。

小生は別条なく精励して居りますから、ご安心願えます。風紀にも熟練

して、増一増やつてゐます。本日は紀元節で、拝賀式後休んでおりま

す。

高(高橋三太郎(小松国次郎))三、小(菊池仁兵衛)国、(長)長、菊仁、各人に逢ひました。一度ならず二度なら

ず、三度も四度も逢ひました。

どうも猛競争で、とても烈しくあります。

どうも見込なく感じますが、三太郎君が時々励まして下さいますので、

一増元気がきます。(及川長作)及長君には未だ逢はず、実に残念ではありますが、

何時か逢ふ時もあるかと思ひます。

どうか先生も村の為青年開発？を御願上ます。既に二回の学科試験もあ

り、何れも良であつた。射撃も四回あり、三十五点(カ)に二十点、残念(カ)あつた。

二回は甲下でありました。内務検査も十七八日あります。

(昭和六年二月十一日)

5 【はがき表】

岩手県和賀郡藤根村

大字後藤

高橋 峯次郎様

歩三一

高橋 徳松

【はがき裏】

御変り無之候哉。定めし御健全に涉らせらる可とは存候。(カ)

小生は別条なく軍務に精励して居りますから御休神願上候。大分雪も消

え、桜の芽も大きくなりました。

来ル五月九日には軍旗祭ですが、内定で未だ確定しては居りません。今

より想像されて、只管期待してゐます。

最早第一期検閲も目前に迫り、来ル十七日より二十三日迄に御座いま

す。最近銃隊ノ査閲及学科試験がありました。題目を示せば左ノ通り。

機関銃陣地進入前、銃ノ点検ハ何故カ。一番ノ点検箇所。装填ノ最モ迅

速ニ且ツ確實ニ出来ス方法。以上の三問題でありました。十分間に終る

ように。算術は $7987 \times 8345 + 8351$  右一問題にして十分間。小生

は算術万点は自信あり。他の問題は太底九十点位は出来て居ります。外

に動作も査閲され、検閲には一番銃手をやらされ、極めて難儀を致しま

す。一番銃手トハ図にて示せば左の如し。

(※図アリ。小サクテ見エズ)

(昭和六年四月)

6 【はがき表】

岩手県和賀郡

藤根村藤根後藤

高橋 峯次郎様

【はがき裏】

愈々暑く、愈々多忙になつて、地方も軍隊も目が廻る。満期兵の除隊前

後二三日といふものは、夜も眠れぬ程忙がはしかつた。考へて見ると、

皆と一緒に郷里の土地を踏みたい心地が充分あつた。いや、いけない、

やめた方がよからう。

十日附歩兵納等卒を命、同日精勤章附與されました。

こんな事はどうでも、本が多く入るので困つたものですな。

頭が痛い。といふのは銃剣術で現在東側の大関の位置にある番附きです。夕、カレルカラ今年の抽籤者何人、御伺します。<sup>(高橋三太郎)</sup>高三上等兵は適任證ありや。

(昭和六年七月)

高橋 徳 松

7【はがき表―軍事郵便】

大日本

岩手県和賀郡藤根村

後藤

高橋 峯 次 郎 様

奉天歩三十一第二大隊

機関銃中隊

高橋 徳 松

拝啓

【はがき裏】

小生満洲派遣に依り黒沢尻駅通過に際しては、遠路態々御見送り被下、且多大なる御餞別を賜り、誠に有難く厚く御礼申上候。

御かげ様で、去る二十日午前十時奉天到着。同日奉天府に一泊し、翌二十一日正午表記へ安着致し、専ら警備に余念無之候。

日夜を問はぬが夜に於て然り。といふのは付近一帯に敵の密偵出沒し、我に暴動を起さんと企つるも、我軍の勇敢なる歩哨の為射殺されます。

我々の混成旅団は殆ど出動して、機関銃丈予備隊となつて残つて居りますが、近く金洲方面へ出動する模様であります。早く出陣するのを待つてゐるのです。二十四日早朝三十一Rの六中<sup>(カ)</sup>が、攻撃せし敵を射殺せしめた数六十名。それで我軍には一名の死傷者もなかつたといふ。非常に愉快です。機関銃の兵隊達などは非常に張り切つて、早く働きたい、やつつきたいと腕を鳴らしてゐます。非常に元気でやつてゐますから御安

心被下度。

(昭和六年十一月三十日)

8【はがき表―軍事郵便】

大日本

岩手県和賀郡藤根村

藤根村軍人分会

同村青年団

同村訓練所御中

同村小学校

於チ、ハル奉天歩三十一

第二機関銃中隊

高橋 徳 松

拝啓

【はがき裏】

□□重ぬるに従ひて、益々寒氣相加はるの候、郷土の諸氏愈々御健勝奉賀候。

陳者、小生郷土通過後、任地に到着せるは去る十一月二十日なりき。爾来錦洲、饒陽河の戦闘に加はり頗る元氣旺盛、勇氣澆洩として、今日に於ては馬占山の主力を圧制、以て撃滅せしめ、現在地に位置を為す。情報聞くに馬占山は当地より北方約五里の土地に於て、約三万の兵力を集結し、一方南方約三里の地に於て二千の兵力を集結し、西方に於ては我日本対抗射撃部隊の騎兵一千余を以て包囲せんとする模様なり。

扱々<sup>(カ)</sup>聞くに、内地各地に於ては我々在滿の兵士の為に御骨折り被下居らる、様子、実に感謝の意を表すものである。決して御心配下さる間敷、小生等としても死するを覚悟致し、皆様の御厚志に幾何の満足を添えるものであります。 草々

(昭和六年十二月)

9 【はがき表―軍事郵便】

大日本

岩手縣和賀郡藤根村

大字後藤

高橋峰次郎様

満州派遣軍歩兵三十一

第二機関銃中隊

高橋徳松

【はがき裏】

拝復

出動せし事八回。

交戦せし事四回。その中にも

錦州饒陽河は相当の苦戦だった。

今では四十度の酷寒も別段感しない。

然し饒陽河及チ、ハルの両駅で車中生活の十日間は忘れがたく、他日の

記念となると思ふ。

近頃は時々此方に十、彼方に二十といふ様に馬賊のチャンコロさんが出

没する。だけど我々はそんなものに目も呉れぬ。唯二三発此の偉大な機

関銃で射撃すれば、忽ち死の巷と化す。

死んでも誰もかまつて呉れぬ支那主義。敵と言へ共、哀れなものさ。近

く錦州総攻撃をする筈。敵は約四万の兵力を集結してるといふ。いくら

四万でも五万でも、我々の叫が行けば後をも見ずに逃げ失せるといふ始

末の奴等だ。さつぱり気合がか、らぬ。俺らあ馬鹿くせえ。ハハ、ハ、ハ。

真友見たくなつたなあ、。先生失礼します。元氣は此の通り。

(昭和六年十二月カ)

10 【書簡―軍事郵便】

大日本

岩手縣和賀郡藤根村在郷軍人分会内

高橋峰次郎様

【封書裏】

満州派遣軍歩三十一聯隊

第二機関銃中隊

高橋徳松

(昭和六年)  
十二月二十三日

【本文】

村の人達や先生の御厚意ありがたい。

上陸後の大要を今此所に簡単に御通知する。真友に掲げる程の文も出来ないものであるが、そうして戴ければ実際光榮と思ふ。

朝鮮釜山に上陸せしは去月十七日午前十時四十分。幾何の休憩をして同

日午後二時何分発の列車に乗った。既に此の時より警戒は充分であった

のである。既に朝鮮にも密偵が入っていると旅団長の訓示が与へられて

ゐた。斯くして、北へくと軍用列車は暴進する。流行歌の鴨緑江を通

過したのは十九日夕方。信義洲と歌の鴨緑江を超ゆれば、直ぐ敵国であ

る。直ちに将士共に嚴重なる警戒を怠りなかつた。車中生活で疲労した

健児等も、絶体(てつたい)に目をつぶらうとはしなかつた。斯くして何なく二十日

午前十時三十分、奉天駅に到つたのである。直ちにそれぐの勤務者、

そして総ての荷物は下ろされた。駅前広庭には居留邦人が日章旗を掲

げて迎へてゐた。閣下の訓示と謝礼(居留民)の言葉がすんで、駅より

約三十町ばかりの日本町に一夜の宿営を命ぜられ、既に勇士等は出発し

てゐた。俺は小野寺特務曹長と二三人の兵隊と共に、兵器弾薬其他総て

の荷物の監視を命ぜられて、拳銃を一丁与へられた。小隊長の命に依り

監視はしていたが、二人や三人で実に心細かつた。周囲には支那人が

種々の見慣れぬ服装をして何百人となく俺達を注視してゐるかの如く、こんな時若しや敵兵がどつと現はれて来るではないかと、実に／＼心細くも緊張は不尠ぬものであつた。幸ひに夕刻、支那のトロッコに多くの荷物は積まれ、共に俺達も乗つて宿营地へ着いたのである。憶病な奴だと思ふかも知れぬが、始めて踏んだ敵国の地、篤恐せざるを得なかつたのである。その夜は充分な警戒と共に故郷の夢を結ばせた。

明ければ二十一日早朝、奉天城外兵工廠に宿営し、此所の警備に當るべく出発し、間もなく到着した。

準備は整へられて、此所に宿営警備をすること一週間。此の間にも昨夜は十人、昨日は二十人といふ如く出没する敵兵を射殺してゐた。その都度俺達は益々勇気づき、益々警戒を怠らなかつたのであつた。斯くして二十七日夜三時、突然出動の命下り、二十八日未明五時奉天駅を立ち、錦洲攻撃の爲であることを知るを得た。軍用列車は第一、第二、第三の三つであつた。俺達は第二列車に乗つてゐた。列車が饒陽河附近に到りし頃、飛行機よりの情報には、敵の装甲列車は直ぐ目前に歩を運んでゐるといふ。

それに敵軍は、その周囲に陣地を占領してゐるといふのであつた。友軍は歩一ヶ中隊（□一ヶ小隊）砲一門を以て警戒をしつゝ、徐々に任地に向つて進軍す。やがて饒陽河を去る三里の地まで進軍するや、敵の装甲列車は直ちに我に猛射を加へ、四方よりも尚その通りであつた。すはこそと戦斗準備は完了してゐたので直ちに我も之に猛射せしが、敵の装甲列車の真中に気持よく命中せしのが砲弾四発である。一部の列車は目茶苦茶に破れ、四方の散兵もバタ／＼と死体を重ねるのではあつた。その距離僅かに千五百米。

第二列車の機関車の直ぐ後に乗つてゐた板倉砲兵大尉が指揮の爲下りんとする折那、敵の砲弾の破片の爲、名誉の戦死を遂げられ、次いで機関手及若干の死傷者を出し奮戦したのであつた。俺達も此の死傷者を見た

が、実に可愛相なものであつた。板倉大尉の遺言などは末世迄話の種になるであろう。

私は毫も恐れず、尚／＼進軍中、突然司令部より進撃中止の命下り、空しく奉天へ引返つたのであつた。途中列車内では、しんとして誰する話をするものがなかつた。唯は食ひしはり、口惜しい／＼と口走るのみであつた。宿营地へ到着せしは三十日午前九時。それ／＼次の準備をして武装も解かず、一夜の夢を結ぶべく寝に著いたのは午后六時。スヤ／＼と眠る疲労さに、妻子のあるものは既に夢の世界に移つてゐた頃と思ふ。九時頃、又もや出動の命下り、眠い目も何のその、自重と緊張とに勇氣百倍。直ちに出発したのはチ、ハルの馬占山軍攻撃の爲。二日午後六時頃着。五日迄車中に生活をし、その間南大宮・北大宮を占領し、五日午後支那工業学校に武装を解いたのである。而して翌日より此所、彼所と出没する馬占山の部下を撃滅し、四日を過ぐる九日、亦々出動の命に依りチ、ハル日本飛行場に移つたのである。此所に九日夜来馬占山騎兵約一千五百、此所を去る三里の西方に終結をし一斉に襲撃するの情報に依り、以来不眠不休にてその警戒の任に当り今日に至つたのである。

此の間も、そち／＼に敵を殺した、馬賊を五十殺した、と昔話の様に毎日の様に。

以下は大意で詳しく言へば出動せし事も未だあり、それは抜にして置き、概略を掲げたのである。

寒さは零下の四十度。曾つて我々は二十二年の生来味はつた事のない酷寒である。然し時世の進運に伴つた防寒具の偉大なる力に依り割合にその感を持たず。益々将卒共に勇氣発瀾となるばかり。去二十一日錦洲総攻撃の命下り、五R・十七R・三十二Rは既に出発した。今頃は準備完了し、戦斗を開始せんとしてゐるであらう。未だその報には接せず、田辺大隊長・各幹部総員、旅団長に総攻撃に三十一加はると懇願せしも、

何か得る所ありて決して許さなかつたそうである。兵士等はガンと起つて暴れる始末。勿論我々として第一線ではあるが、総攻撃に出動した五十七・三十二が非常に羨ましい。

而し再び馬占山軍が此の飛行場の周囲に兵力を終結しているといふ。飛行機や其他の情報にある敵は、此所にある我の主力が錦洲にゐつたのを幸ひに、逆襲をして知らぬ間に北大営・南大営及此の飛行場を占領する計画らしい。確かに覚束ない俺達が考へてもその通りである。時こそ来れ、百万の敵をも恐れる我ぢやない。日本軍人、而も日本一強い東北健児である。

日本權益、民留民保護の為、必ずや皆様の御期待に添ふ。俺も日本男子である。言へば数限りない。

此文を書連ねて、皆様の暇を戴く事にする。

村民の御厚志はありがたいが、何物も入らぬ。必要なものなし。唯健康な身と精神が必要であること丈を信ずる。大丈夫、御心配入りませぬ。

菊池慶蔵君は下士勤務を附けたらうと思ひます。私もやつと上等兵にはなつた。下士勤務は各中銃隊に一名宛のみ。中隊にゐたら俺もなつたかも知れぬ。その点は不悪。努力が足らなかつた結果。自業自得である。至方ない。入営兵によろしく。満洲へ来るかも知れぬから、その積りで。何事も無言で真面目でなければ軍隊は駄目といふ事を感じたものだ。

無論、多少勉強もしなければいかんが。

では此のみ。村の人達によろしく。

先生 北<sup>(満カ)</sup>道の父母も多少案じてゐるから先生に手紙よこしたと思ふ。

(昭和六年十二月二十三日)

徳松

11【封書―軍事郵便】

岩手縣和賀郡

藤根村

高橋峯次郎殿

【封筒裏】

満洲派遣軍歩兵第三十一聯隊

機関銃隊 高橋徳松

【本文】

拜啓

路傍の露さへ氷と化し、桶の水さへ凍らんとする今日此頃、郷里の皆様愈御壮健の由、大慶至極に存上げます。

過日は待ち焦れてゐた真友を御送慰下されまして、誠に有難う存します。厚く御礼申上げます。

及川君、千葉君も共に満面に笑をた、へて拜見致しました。何故か私達は此の真友が私達の真友と思はれてなりません。

多忙に任せて近況を簡単に申上げます。

熱〇方面には、張・馮・唐の三邑が頻りに策をめぐらして、某地襲撃〇〇〇〇など騒がしい。

東辺道方面、現在は理想郷とも云へき平穩にはあれど、学良の操縦による〇〇に外ならないのであります。

万〇里方面、事件と共に蘇の野郎が学良と頻りに無電連絡を密にしてゐる。之等などは我々の知らぬ何物か、ひそまれてゐるであります。非常な込み入った事が

其他、北満の〇〇愈〇〇であります。之が為に、既に〇聯隊は主力を以て向つた事は事実であります。先づ右聯隊は東北健児、即ち岩〇縣

の兵隊と云つて差支ありますまい。私達は都合悪く当地に残〇〇。千葉君も同じです。

何れ随分紛擾する状態になつてゐます。一々述べますと書く暇を持ちません位です。詳細は甚だ申し憎いので、殆ど簡単でつかみ所もありません。

ん。軍機と云つて最も八ヶ間敷、差出郵便物も一々中隊幹部の閲覧を得てです。今ゴタ／＼の非常に多忙を極めてゐますから勤務中寸暇を利用して申訳ありません。

時期を見て詳しく申し上げます。

高橋 徳 松

藤根軍人分会御中

(昭和七年一月)

12 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡

藤根村後藤

高 橋 峯 次 郎 様

満洲歩三二第二機

高 橋 徳 松

【はがき裏】

待つてゐました真友、到着致し

ました。御礼申上ます。

入営兵の中隊はわからんので

すか。

元チ、ハル〇〇学校にゐましたが、

此度又別の所へ来ました。

それでも同じ一里共離れてない所です。

及川君とも時々逢へますが、一寸離れて

ゐるので、中々勤務以外、外へ出

るを禁しられてゐますので。

先は、御礼のみ。

(昭和七年一月)

13 【書簡―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

後藤

高 橋 峯 次 郎 様

【封書裏】

満洲派歩三一第三ノキ

高 橋 徳 松

(昭和七年)

七月三日

【本文】

御挨拶は抜として、最近の状況をお知らせ致します。

一、七月中旬来錦洲部隊(卅一主力)の戦死者、憲兵伍長一、同上等兵

一、歩小原上等兵一、太田軍曹、川村軍曹、千葉一等兵、之等は何れ

も歩三一ノ兵營たる北大營と錦洲駅間に於て便衣隊に射殺されたものである。

扱て、此の便衣隊の正体は何者であるか。

一、之は極最近の出来事であるが、石本権次郎(元歩兵軍曹)軍の密偵

であるが、去る四日前注目されてゐる熱河に情況探知せんとして入

や、熱河軍の為に捕虜となる。

一、次の事も極最近で、之には軍も出動して撃退したのであるが、熱河

に通ずる鉄道を破壊さる。之がため軍は朝陽寺と称する所を占領し、

今尚若干の部隊で警備をしてゐる。之の朝陽寺は熱河の端で、此の義

洲から又一番近い。

以上の事件は何を意味するか。原因は、主反者は、此の答へは今更言ふ

迄もなからう。私一人の想像ではあるが、此の糸をあやつるものは唯一

人でなければならぬ。仕事をするものは、勿論多くさんのものである

は言ふに及ぶまい。

石本の件に付いても、参謀部間の交渉の結果、一週間後には返すと言ふ。その一週間は明日一日だけだ。返された話もなければ、返される話もない。正に同胞の犠牲になるは免れまいと思ふ。

是に於ては勿論、軍は引込んでゐられますまい。熱河攻撃は目の前に迫つてゐるといふても、うそではない。証拠なしには攻撃は覚束ぬ模様ではあつたけれど、国際連盟上、しかし、此際の原因を唯一の所以として、断全<sup>(マ)</sup>実行して差支ないのである。

独立守備と三一部隊は交代の話もありましたが、こんな関係上取り止めとならう。

極簡単でした。とても多忙故、乱筆にて御免下さい。

先生

徳松

14 【はがき表―軍事郵便】

岩手県和賀郡藤根村

軍人分会

高橋 峯 次 郎 殿

【はがき裏】

義洲警備、是は筆には書き易いが、重大な任務であつた。去る七月〇〇〇部隊と無事に交代を終えて、再び錦洲へ舞ひ戻つた。此所は便利のよい所だが、又〇〇〇激しい。従つて、情況も是に伴ふ。昨日及川君と長の対面をしました。千葉君とも逢ひましたが、目で物を言ふたゞけ。何故なれば、彼等も又交代で多忙此上もなかつた最中だつたからです。政次郎<sup>(高橋)</sup>君はお気の毒な至りです。先は錦洲機関銃隊

(昭和七年八月)

高橋 徳松

15 【書簡―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村  
後藤

高橋 峯 次 郎 様

【封筒裏】

満洲派遣歩三十一聯隊

機関銃隊

高橋 徳松

【本文】

残暑今尚八十度。戦斗にも勤務にも餘程楽になりました。盛夏の時は百二十度もありましたが、本月中旬からめつきりと冷たくなつて参りました。朝夕は十月末頃の氣候の様に思ひます。彼の石本氏は未だその俣になつてゐるさうです。或は国民の犠〇となるのぢやないかとも思はれるが、そう易くは□いんでせう。

熱河或は此所とも、所々方々にそれ義〇軍だの、それ某の操縦する〇だのと非常に□擾して、又錦洲を襲〇するの、義〇を襲〇するのと、いや中々、二人と寄ると花々しき〇〇と、何時もこんな話です。

各地の鉄道破壊され、その附近に防禦陣地を構成して軍の到達を待つと言つた様に、面白くなりました。きつと、やつて見せます。

石川、小原の両兄は教育召集で入隊してゐるさうで、此の間通信ありません。

及川、千葉の両君も至極元気でやつてゐるらしく、公主嶺<sup>(カ)</sup>の加藤□□も素敵な通信なんかよこしてくれれます。

旧お盆ですが、もうなくなる頃ですな。軍隊にゐると、御承知の通り、別に外の事は思はぬが、時と節との餅、赤飯なんのと、こんなものにはかり思ひを寄せると言つた様な有様。此のお盆中戦友同志が何の話をするかと思へば、お盆お赤飯の話で持ち切りでした。まるで子供見たいにダダをこねる古兵さへあつて、これでも戦斗に出れば働くのかな、と思

はせられます。

ニシンのボンメ巻なあ、あの、テンに醤油を掛けたやつよ、いや干鰯のダシでササギ汁、いやどうだ蒸しがけの赤飯なあ、あまり小豆の入らぬやつよ。なんて飛んでもない空想を描ひて、中には堪へ切れなくなつて炊事軍曹にダ、をこねる様に請求する者もある。なんと面白い光景です。こんな話をして、おらあ元来麦飯は餘り好かんなんて威張つていくせに、さあ飯だとなると目を白黒させて、内地の聯隊にゐた時の食器に、丁度富士の山盛りに盛つたやつを二杯位食ふ、ずいぶん勝手なものです。

私なども、家へ無事で帰つたら、どんなにして食つたらよかろうと、心配してゐます。

飛んでもない事ばかり並へました。

今日、ビールが1/2宛下給されたので、昨日の討伐祝ひに一杯かたむけたら、こんな事になりました。先生、感心に徳松は酒□□は全絶。飲まなくなりましたよ。香をきいたばかりでもいやです。ビールだけは少し飲めます。匆々。

新聯隊長早川大佐 十九日着赴任

副官鷲尾少佐

機銃隊長青木大尉 元黒中配属

先は之れで。

徳松

先生

(昭和七年八月二十四日)

16 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

後藤

高橋峯次郎様

満州派歩兵三十一聯隊

機関銃隊

高橋徳松

【はがき裏】

御壮健で何よりです。村の変化もないでよろしいです。私も相変らす元氣です。□□ですけれども、国家の為です。演習召集者中進級者に対し祝福します。青年会館設置に付いても、お喜び申上ます。

二十十日、此方も別条ありませんでした。

高梁は遂此頃から刈取る様になりましたが、匪賊の奴等が各方面の農民に対し徳刈を命じた様で、しかし、之には應しなでせう。

石本氏は、そのま、になつてゐる。

本年徴兵合格で抽籤相当者は誰々ですか。

真友は発行したら、どうかお願いします。私等は應援して発行させる丈の地位もありませぬから、どうかお恵み下さい。千葉君は義洲(カ)に於て元氣でやつてるさうです。及川君は感心(感)します。あ、ゆう公德心の旺盛な軍人を出した村は名誉です。以前目醒めぬ村など、申しました。平にお許し下さい。今始めて後悔させられます。加藤□□は相変らす元氣の由。では後日詳しく。

(昭和七年九月カ)

17 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

藤根

高橋峯次郎様

【はがき裏】

抽籤の結果を御知らせ下され、承知仕りました。何でも入営此方らしく、でその積りでみて間違ないでせう。

及川君も頗る元気でやつてゐるさうです。

小生も例の通りです。

政次郎君の疾兵除隊は残念ですが、止むを得ませぬ。

小生、明後日某方面に分屯になりますが、御通知下さる時には以前と同じで結構です。

では、又何れ。失礼します。

満洲派遣軍歩兵三十一聯隊

機関銃隊 高橋徳松

(昭和七年十月)

18 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

藤根

高橋峯次郎様

【はがき裏】

拝啓

再々御尊書有難御礼申し上げます。

新聞は去年は到着致しましたが、栗は御折角の御志も未着です。何處かに留よつてゐる事と存します。

先は乱筆にて。

(昭和七年) 十二月五日

満洲派遣歩兵三十一聯隊

機関銃隊

高橋徳松

19 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

後藤

高橋峯次郎殿

【はがき裏 ※印刷】

輝き渡る皇国の威陵は今や満洲国四千万民衆の上に幸福と平和の楽土たらしめ、茲に光輝ある新年を陣中に迎へるに当り益々国威の隆昌を期し、粉骨碎身各位の期待に副う覚悟に御座候。年頭に際し、遙るかに貴下御一同の万福を祈り、年賀の御祝詞申述べ候。

満洲派遣第八師団

兵第三十一聯隊機関銃隊

高橋徳松

(昭和八年一月一日)

20 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎殿

【はがき裏】

山海関戦に参加、異状無之、

御安神願上候、

新聞紙上にて御承知の事と存し候に付、追て詳報仕可候、

於満洲 徳松

(昭和八年一月)

21 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎殿

【はがき裏】

久しく御ぶ沙汰致しました。  
昨日再び所属の第二機関銃中隊に編入になりました。  
近く問題の某方面へ出るべく、その準備に余念なし。  
後日、又詳報します。

満派歩三十一第二機関銃中隊

高橋 徳松

十八日斎藤庄右衛門と  
始めて会ひました。

(昭和八年二月)

22【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

高橋 峯次郎 殿

【はがき裏】

待たれた某地へ二十日出動。

勝か死か、既に覚悟と自覚は心に刻まれた。

最後の今日を待たれよ。

満派歩三十一第二関中隊

高橋 徳松

旧所属中隊に帰った  
初年共に行動す。

(昭和八年二月)

23【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡

藤根村

高橋 峯次郎 殿

【はがき裏】

〇〇<sup>(マ)</sup>攻撃ニ参加、  
異状ナシ。乞フ御安神  
八日 於凌源

徳松

(昭和八年三月)

24【書簡―軍事郵便】

岩手縣和賀郡

藤根村後藤

高橋 峯次郎 殿

【封筒裏】

満派歩三十一ノキ

高橋 徳松

【本文】

余言は省く。如斯健在なる事は本文そして証明すべし。多忙此上なく、  
文面そして証明すべし。

今夜十一日、下士官以下到着祝いとして支那酒二件、四十銭代、ナスビ  
漬二百匁五十銭代。

二月二十日、出動下令と同じに乗馬隊MG分隊長交代を命ぜられ、異状な  
くして所属第二MG中隊へ帰隊するや、中隊長村田大尉満面に笑をた、  
へ、自分を呼び寄せて、曰く、「高橋は第二分隊長だぞ。しつかりやつ  
て来い。中隊長は師団命令で残留する。心配するな」

聡て奮起して列車に乗る。汽車は容赦もなく熱河朝陽寺へ向け幕進す。

〔追伸〕 藤根立野、加藤、早見より本日手紙着。改め

長清水、 〔マ〕て高橋恭治書く余祐なし。先生

から、その旨よろしく。」

二十二日、何なく朝陽寺へ到る。明日の戦闘準備と馬の取扱で勞れ果た初・二年兵を励まし、武装も解かず、アンペラの上に横たはる時、午后零時四十分。眠りしかと思へば、既に出発時刻の午前五時半。カンメンパンを頬張り乍ら朝陽寺を發す。途中別條もなく行軍を続け、始めて行軍する星一つの兵を激励し、遂に十六里を歩いて午后十時劉龍台に着く。出発前夜中隊長末吉中尉の命に依り、自分は給与係兼分隊長とする。宿營せんとして該地に着けば、給与係の任務あり。分隊を統一せんと□ば、その任務あり。如何せん、からだ一つの此身心の。然れ共、与へられたる任務なり。のみならず国家を顧みる時、二重の任務辛らからんとは。

既に師団は熱河に侵入し、某方面に於ては交戦、或は激戦と伝へらる。



右図ノ通り

攻撃計画

二十四日迄は途中先づ異状なく、交戦せりと雖、匪賊の多ければ四五百、敢て員数の仲間ならず。要は吾等は正規軍なり。

初年兵は足は痛み、空腹、馬はあり、機関銃はある、背囊は約七貫、防寒被服着用。嗚呼何たるかな。自己一人と雖、その重量実に三十貫の重きには非ずや。

私の分隊初年兵一名は、遂に当日腹痛に罹り、手当を受くる身とはな

る。元より分隊長の責任とは雖、如何せん生きた体の人間ならずや。涙を流して某地に宿營。時午后十一時。殆ど休憩時間如くして、明るる二十五日未明五時出發。前日の初年兵漸く元氣回復し、同行し、朝陽に着く。時午后四時。出動以来、太陽の未だ光々とする真昼宿營せるは、本日始めてなり。踊り上つて喜ぶ兵士達。宿營地に着くや、何より大事な歩兵の本能、足の点検。某初『分隊長殿、某は足に豆が中隊全員に一つ、御馳走するだけ出来ました。直ぐなほします』。軍人の意地も此所にある。出發以来交通機関の不便上、大行李は遅れ、且つ少なく、依りて満洲産の粟飯、咽喉につまる。粟飯も平時の米の飯に価ひする。かくて朝陽に滞在する事三日。此の間、歩哨線の確実は吾等を休養せしめず。三月一日早朝、出發をして凌源に向ふ。

II大隊は独立行動、初の五日を行軍をして目的地凌源に着く。爾来当地警備中敵と交戦三回。詳細は後報す。

R主力は熱河の主府承德へ本日辺り着の筈。

何れ、又、余は御想像に任す。皆様によろしく。多忙に付。

高橋先生へ

徳松

(昭和八年三月)

25【はがき表「軍事郵便」

岩手縣和賀郡

藤根村

高橋 峯次 郎 様

【はがき裏】

異状アリマセン、

第一線ハ相当〇〇中。

廿三日

徳松

(昭和八年三月二十三日)

26 【書簡―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

藤根

高橋 峯次郎 殿

侍史

【封筒裏】

満派歩兵第三十一第二MG隊

高橋 徳松

(昭和八年四月)  
五日

【本文】

その後も無事東奔西走中。乞ふ御安心。

第二大隊は本朝凌源出發、行軍十日間の予定を以て第一線なる界嶺口へ向へり。該地は山□関西方約十里の万里の長城眼下に在りて、目下敵軍数千、峻悪なる高地なるを利用し頑強に收容陣地を構築して防備中。

第十師団主力の目下警備の任、大隊の到達を待つて之と交代し、哈爾□方面へ向ふ筈。愚生等は一ヶ分隊、過日該地人兵糧彈藥補充の任を負ひて出發し、本三日帰凌の所、既に大隊の出發せる後で依つて明四日早朝、自動車にて第二大隊に追著かんとする心算。

界嶺□は実に素晴らしい高地の連峯。のみならず万里の長城、長蛇の如く流れ、雑木は空を覆ひ、昼尚暗く、戦地には持つて来いの所なれ共、皇軍の位置甚だ不利、○○○を陥落せしむるに於ては、恐らく○○○の組織に依りてせずんば望みあるまいと愚考せらる(廊講鎮を偲はる)。行けく、行く所迄行くんだ。徳松には神様がついてる。該地に於て最後の名譽を得ん迄は一切通信せず。御了察あれ。

先生

徳松

各位

(昭和八年四月五日)

27 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

後藤

高橋 峯次郎 様

五月十四日着

【はがき裏】

高橋 無事

奮闘 中

熱河省内を端から端まで

ルンペンの様

徳松

余は新聞紙上で御承知の筈

(昭和八年)  
五月2日

28 【書簡―軍事郵便】

岩手縣和賀郡

藤根村

高橋 峯次郎 殿

【封筒裏】

満洲国凌源

関東軍臨時第二野戦病院外科

高橋 徳松

(昭和八年)  
四日

【本文】

久敷御無沙汰致しました。お許し下さい。

五月十日の戦闘に於て、惜しくも受傷しまして、□□目下凌源野戦病院

にて加療中。近く退院の筈です。早速ですが、時の状況を左に簡単に記して皆様、否青訓生諸君の参考に供したいと存じます。

師団ハ上旬子附近（石匣鎮ヲ含ム）ノ敵ヲ攻撃殲滅セントシテ、十日午後二時陣地偵察ヲ終ヘ、同六時露営地出発、同九時敵前約百米ノ高地（□）ニ集結。右ヨリ31i 5i 17i 32iノ攻撃部署ニ依リ配置、大隊ハ（II / 31i）師団ノ最右翼トナリ、同十時夜襲ヲ決行、同十二時敵ノ第一線、即チイ、ロ（友軍認識ノタメ附シタル地名）高地ヲ奪取、突撃スル事四回ニ亘ル、偶々第七中隊MG一小隊が第一線ノ奪取スルヤ、敵ハ之ヲ憤リテカ第七中隊ノ二小隊及MG分隊ノ左側背ヲ包囲セントシテ逆襲又逆襲、歎声ヲ挙ケ突撃スルノ激戦ニ至ル。此ノ時○隊長ハ之ヲ見兼ネ、決意ト兵士ノ意氣ヲ鼓舞シ、「突…撃」進メ…ノ号令、又身ニ泌ミテリ、シ。該敵ハ之ヲ恐れ四散シ、凹地ヲ利用シ本陣地ニ後退ノ模様ナリ。軍ハ之ニ益々勢ヲ得テ進出スル事実ニ五十米ノ近キニ迫ル。然リト雖、敵軍既ニ四五千、加之掩蓋銃座ノ本陣地、後方ヨリハ益々ソノ兵力ヲ増シ、自動火器ヲ激増シ猛射シ来ル。時迫リト兼テ決死ノ覚悟ヲ決メシ第七中隊第二小隊及MG第二分隊ハ、先ツ左高地ノ敵ヲ压制殲滅シ、続イテ正面ノ敵ヲ包囲スベク必死ノ覚悟ト必勝ノ信念ヲ以テ一部ヲ左高地ニ進出セシメ、MG分隊ハ之ヲ掩護ノタメ正面ノ敵ヲ猛射ス。第七中隊第一小隊及MG第一分隊ハ敵ノ右翼ヲ攻メ、逐次敵陣地ヘ迫ル。（第五中隊及第六中隊ハ激戦又激戦ヲ重ネ、前進ノ防ケナル敵ノ地雷ヲ避ケツ、第七中隊ノ後方近進出ス）。

敵ハ全ク右往左往ノ混乱状態ナルモ、兵力大ナルニカコツケ自動火器ノ乱射、実ニ筆舌ニテハ現ワサレズ。軍ハ益々士氣ヲ鼓舞シ、逐次々々蟻ノ如ク這ヒ敵陣近く逼ル。之即チ六回目ノ突撃ヲ敢行セントスルニ在リ。

突撃ヲ敢行スル旨、第七中隊第一小隊（右翼小隊）ニ伝達シ、伝令ノ復命スルヤ、一息ヲツキ、三方ヨリワットバカリノ歎声ヲ挙ゲ、「突撃——々々」

受傷ノマ、聞クモ雄々シク、又勇マシク敵中ニ躍リ込ミ、日頃鍛ヘシ腕ヲモテ、銃剣逆手ニ縦横無尽、遂ニ完全ニ敵ノ第二線ヲ占領ス。夜ハホノノト明ケ涉リ、太陽ハ光々ト東ノ空ヲ染ムル時、日章旗ハ早くモ該地ニサン／＼トシテ翻ヘル。「万歳々々…々々」傷ノ痛ミモ忘レテ頭モモタゲ、日章旗ヲ拝スル斎藤一等兵ノ目ニモナゼカ露カ光ツテ見ヘタ。時六時。

私達負傷者ハ直チニ後送されました、め、その後の状況はよくわかりません。唯の一部を書いたのみです。

MG二分隊ハ私ノ分隊デス。

之からが師団の本場の檢舞台です。他ノ聯隊も激戦ヲ重ネテ、十四五日頃石匣鎮ヲ占領シタ筈です。

四月月上旬より構築した陣地故、随分凄いものでした。敵乍ら感服せざるを得ませぬ位、鉄條網など十重二十重に日本軍の方法と何等変つた所はなく、何せ外国の陣地技師とかが指導したといふ話ですから。それに地雷が一番恐ろしいと言ひ度くないのですが、實際危険です。人馬の通れる所には何所の差別なく仕掛けてあるのですから、之がため一度に十数人もやられた隊があります。野砲隊の馬諸共木つ葉飛びになつたのも、戦車が飛んでなくなつたのも聞きました。

兎に角細かに言へば、二日も三日も書けるでせう。新聞紙上で御承知の事ですから。でも実事は矢張り私等でせう。嘘偽は書きませんから。又之から退院して中隊へ復帰してから、詳しく状況を見聞してお知らせします。何よりも先づ早く退院して、私が入院中休んだ武力と戦死された戦友等の仇を撃つ。何よりも之が現在の私の望みです。そして、無事だかどうかの、千葉君・及川君・斎藤君に会ひたいです。

では先生、訓練生によろしく。

病院にて

高橋 徳松

(昭和八年)

29 【書簡―軍事郵便】

岩手縣和賀郡

藤根村後藤

高橋 峯次郎 殿

【封書裏】

派歩三一第二機

高橋 徳松

(昭和八年七月)

【地図】

新開嶺附近敵陣地要図

五月上旬ニ於ケル(四六八ページに掲載)

【地図】

自五月十日 至五月十九日

新開嶺及密雲ニ向フ追撃戦闘畧図(四六九ページに掲載)

30 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

高橋 峯次郎 様

【はがき裏】

長らく御無沙汰しました。

その後村内にはお変わりありませんか。

大分酷暑的になった事と存じます。私も至極元気でやっております。

目下古北口の警備で長城を周囲に見て、専ら任務に邁進するのも又、我等に相応しい情〇です。

武藤〇〇君の御薨去は、我等の等しく惜しまる、ものであります。

遥拝すると共に、深甚の哀悼を表してゐる次第です。先は後日詳細にお知らせ致します。

徳松

(昭和八年八月)

31 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡

藤根村藤根

高橋 峯次郎 様

【はがき裏】

拝啓

本日御葉書拝見しました。

役場からも近況を知らして下されました。丈夫でやっております。噂に依りますと、凱旋とか何とか(実際、我々)にもわかりませぬが北満方面の形勢再び

〇〇告げるに方り、如何と思慮してゐます。

此の余暇を得て、支那の色々を書き始めました。出来上りは参考の為に御送りしたいと思つてゐます。

別段申上げへき事ありませんから、後日に譲ります。

満洲派歩三十一Ⅱノ機 高橋 徳松

(昭和八年八月)

32 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

藤根

高橋峯次郎様

満洲歩三二二ノ機

高橋徳松

【はがき裏】

秋です。日中の暑さは尚去りやらざるとは言へ、全く秋です。

朝夕夏褌一枚では涼し過ぎる感があります。こう涼しくなつて来ると、もう一度に寒くなるです。大陸の氣候の支那で、別に不思議もない事です。

稲葉農家組合より、毎々新聞を送つて戴いてゐます。山の中にゐますと、之が一番の慰です。実にく有難いです。

斎藤、千葉君には随分長く会ひません。何事もない筈です。遠く離れてゐなくても、多くの事條で会はれないです。

及川君とは時々会つて二人でカメラに入つたりして、郷土の話をしてゐます。では。

(昭和八年九月)

33 【はがき表―軍事郵便】

岩手縣和賀郡藤根村

高橋峯次郎様

派歩三一第二ノ機

高橋徳松

【はがき裏】

新聞及真友、正に落手。

厚く御礼申し上げます。

真友は三月、新聞(和賀)は八月二十七八日発行のものです。交通機關の關係上、既に一ヶ月を費し、真友などは半年もかゝつてゐます。

郷里も変化ない様拝察され、喜びに堪えません。

折角と私達の為に御骨折り下されまして感謝の外なく、恐縮です。同郷出身者何れも杜健、御安心願ひます。先は後便にて。

(昭和八年九月)

34 【書簡―軍事郵便】

岩手縣和賀郡

藤根村

高橋峯次郎殿

【封筒裏】

(昭和八年)

九月三十一日

満洲派遣軍歩兵三十一聯隊

第二機関銃中隊

(欄外)

停戦協定後ノ第一信

【本文】

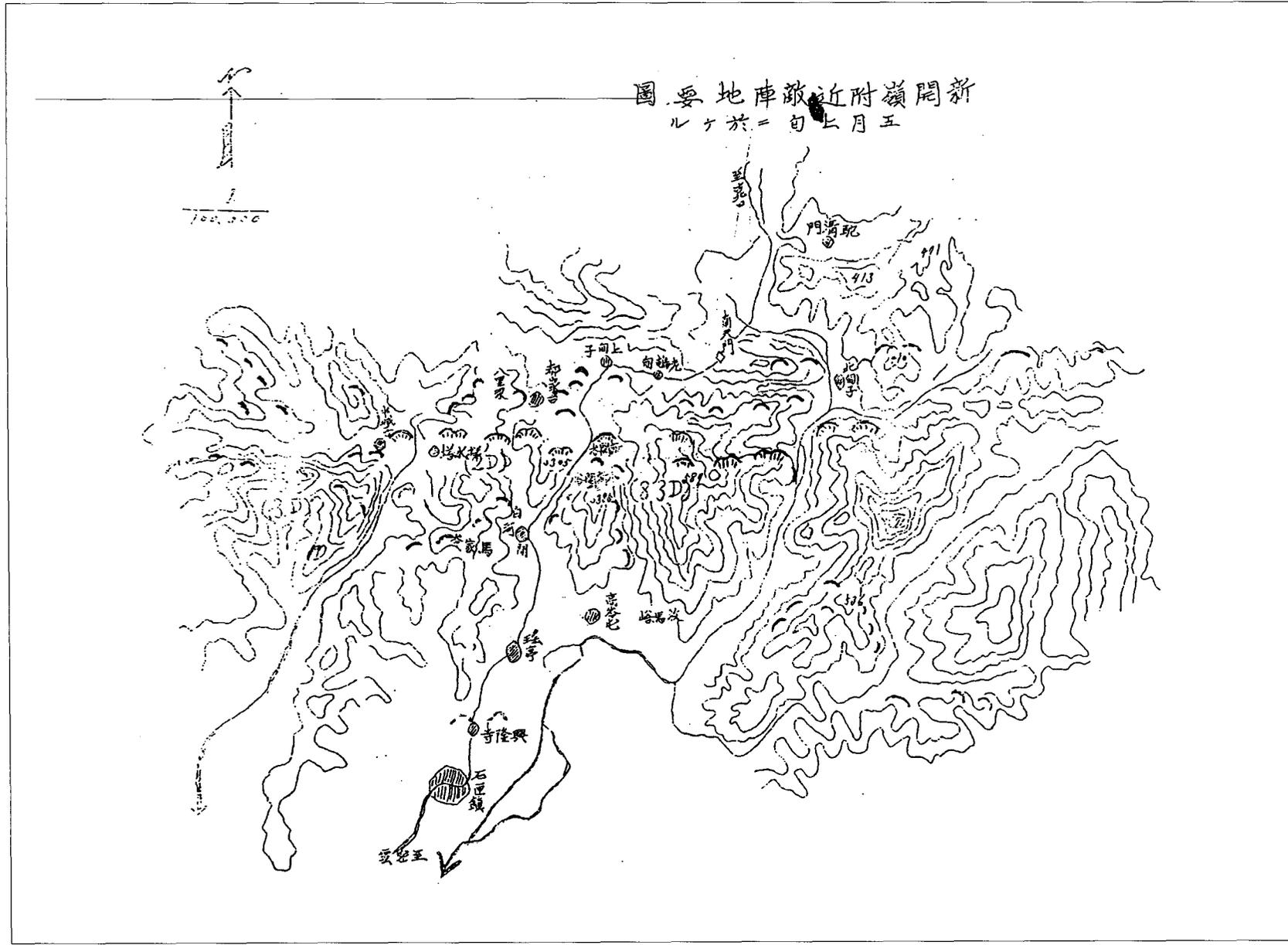
天高く馬肥ゆるの候と讃へらる、秋のさ中、各位様には御消光如何にや。

農家の収穫時で御多忙の事と存し上げます。今年は全くの増収で農家の等しく喜ぶ、との報を伝致致し、我が事の様喜んでゐます。満洲にも再び酷寒と称へらる、淋しい冬がボツボツ訪る、に至りました。

之を顧みて思ふ時、ひしくと過ぎし冬を浮へて、自づと悪寒を生して来ます。三度満洲で冬を迎へるの境遇に在りて、益々自重と奮闘を誓心してゐる次第であります。

此方の状況を簡単に記して見ます。

曩に停戦協定成りて、北支、熱河其ノ他各地共稍々平穩にして、僅かに反満分子の暴動を見るのみ。従つて我軍は長城線に或ひは南滿鉄道線に





各々撤退し、協定に依る地区内の警備に（治安維持）任してゐました。我が師団は□平縣附近に位置し、其の中の我々第三十一聯隊は主力を古北口に、一ヶ大隊及IR一分隊を興隆縣に、一中隊を石匣鎮に差遣位置し該任務に邁進してゐたのであります。然るに本月十七日我が第二大隊は軍命を拜して新任務を帶し古北口を出発し灤平市に至るや、突然或る企図を有する支那側宋振武軍統々と北進し来り、元難戰地たる懷柔附近に進出し、該地附近に防禦陣地を構築するに至る。その兵力約五万にして、武器は元より野山砲其の他の自動火器を有しあるを以て、密雲警備隊は直ちに該地に赴き何なく懷柔を占領せり。然るに該軍は懷柔南方地区に累々たる塹壕を堀築し、稍々もすれは挑戰的態度をなすに至る。依つて我が聯隊は二十五日総出動を行ひ、目下懷柔附近に進出し在り。而して其の交渉を求めたるに對し、宋軍は「我等は南京に赴くものである。依つて長城線を通してくれ」と称へたと言ふ。然れども協定線を超越せる該軍に對し、我軍は熱河河北の安寧を亂し協定を打破せる其の罰目は絶体に許し難し。速に撤退すべし、の要求をせり。然るに宋軍何等之に對して服せず、却て益々防禦設備をなしつゝあり。一昨二十七日軍の一部は之に對して総攻撃を開始す。二十八日夕刻に至るも尚戰の続くあり。私は中隊長の命令に依り大隊重要書類の監視長として残留しました。一線に行く事の出来なかつた事を残念に思つてゐます。然し命令の如何共なし難き、絶体服従を守つて此の重き任務を完全に果す覚悟で居ります。

現在灤平市に僅かに三十名の兵力しか居りません。而して各地に出没する敗殘兵或ひは匪賊団と其の襲來を顧慮し、充分なる警戒と緊張を持つて任務に當つてゐるものであります。前記の情況を総合して見ますに、宋軍は南京行は偽であつて、矢張り密雲或ひは長城附近に無事到着せば、長城を頼みて北方の日本軍に喧嘩を売り、現在僅かな我旅団を陥入れ激退し、而して北京方面より来る支那中央軍を目茶苦茶に破つて、泡

よくば北支を我が物にせんとしたる野心には非ずや、と考へられます。協定線を超越する事の許すべくもない日本軍である事は、彼等とて百も承知の筈です。而して懷柔附近の陣地は、北京方面に視向せる陣地と北方我軍の在住地方面に視向せるものとあるを以て、私丈の推察ですが、右の野心からだろうと存します。その後の情況、今不明。明日辺り無線等にて入る事と思ひます。

（昭和八年九月三十一日）

35【書簡—軍事郵便】

岩手縣和賀郡

藤根村藤後

高橋峯次郎殿

【封筒裏】

滿洲国派歩三一ⅡMG

高橋徳松

【本文】

幾久しく御無沙汰致しました。どうぞ御許しを願ひます。

今日は昨夜からの積雪、雪降で約七寸から積雪しました。

一段、寒くなつた感があります。然し例年より約三週間も早いので、根雪になるかどうかは疑問でせう。

その後如何ですか。御壮健かと存じます。何時も楽しみ深い和賀新聞を御送り下さいまして、感激の外ありません。衷心感謝の意を表します。

扱而滿洲国も今や支那軍閥征定と共に、日昇的發展を示し、僅か敗殘せる兵匪の出没するも、先づ問題外で、結局は軍の討伐等に依りて或ひは帰順し、或は根底的滅亡になるべきは火を見るよりも明らかです。

曩に壯支言々と密雲、□柔附近を徇へる方吉聯軍も、中央軍及日本軍の制圧に勢力を憂ひて南下し、以後全くの平穩に期した状態にあります。

次に我々三年兵も、愈々在郷軍人になる日の近きに至りまして、本日下(月の)御当地出発、十二月十日大連港出帆、同十四日字品港上陸、一路留守隊(誤りカ)に向ふべく目下師団の輸送計画に基き準備中であります。

留守隊除隊は十二月下旬と想像してゐます。

私は二三年辛棒しやうと存しまして、留満する事に致しました。格別の志とはありませんが、少しばかりの志もありません。職業も過日指定せられまして、満鉄社入に決められました。その内い、事を物色し様と存します。及川君も留満とかで奔走中です。然し彼は既に決定されてゐる模様です。

和賀郡出身が一番多い様で、現に私等の中隊に留満者二人ですが、二人共和賀郡で、ヨウするに私と立花村出身の人です。

帰郷して見たかつたですが、それから渡満するとすれば相当の旅費も係りますので、思ひ止りました。

何れ又後日詳しく申し上げます。

新京の加藤さんにも会へるかと存します。

(昭和八年十一月カ)

36 【書簡】

大日本帝国

岩手県和賀郡藤根村

高橋 峯 次 郎 様

【封筒裏】

満洲国

熱河線凌源満鉄自警隊本部

高橋 徳 松

【本文】

謹みて新年を賀し奉ります。

久しく御無沙汰致しました。

御壮健の事と存し上げます。

二十六日歩兵伍長に任せられ、同除隊致しました。それ〴〵決つた職につき邁進しつゝ、あります。

表記の組織は在郷軍人を主として、総て軍隊式に出来てゐますが、将来本社員とならんとして各自腕によりを掛けて奮闘して居ります。目下問題の北満鉄道と北支独立の光明を有し、若し之が実現せば当然望む本社員となる訳ですが、何れにしても私達の職務は前途遼遠であります。

何故在郷軍人を主として採用したかと言ひますと、言ふ迄もなく兵匪出没等の万一を未然に防がんとするには軍隊教育を受けた者でなければならぬと言ふ処からでありまして、自警隊長も元陸軍の老將校でして、現在では満鉄社に取り立てなくてはならぬ大黒柱であります。

何れ後日詳報致しますが、及川君共期待を戴いてゐながら帰郷せなかつた事をお詫び致します。

何卒不悪御了察願ひ上げます。

分会の皆様にもよしなに御伝言願ひます。

高橋 峯 次 郎 殿

高橋 徳 松

(昭和九年正月カ)

37 【書簡―軍事郵便】

岩手県和賀郡藤根村

在郷軍人分会

高橋 峯 次 郎 殿

【封書裏】

満派歩三十一乗馬隊

十七日

高橋 徳 松

【本文】

謹啓

春陽の候、郷土の御皆様愈々御壮健に涉らせられ大慶に存上げます。何時も乍ら、郷土の新報たる真友を御送り下さいまして、恐悦に存します。衷心より御礼申上げます。

春漸く酣にして、□□のことくは麗かなる春陽に感謝に満ちて晴天の上空を仰ぎ、明朗として見ゆ。懐しの郷土も今や其の極に達し、桜花爛漫の裡に農村開拓の更正に益々奮斗せらるる其の労苦を想ふ時、筆舌に尽し得ぬ感激の涙に烟ぶ禁し得ません。

遥かに遠き満洲の一角に於て、益々御進展の程御祈り致します。

満洲にも漸く麗かなる春が訪れて参りました。熱河名物の杏、梨等の花も今や酣に咲き誇り、路傍の柳は一雨毎に葉を染めて、そよほぐ春風に身を委ぬ。彼方の山丘には、憐れにも健気なる無名草が、淡い夕日の光を受けて微かに春を味ふ。満人及在留邦人の僅かに花見の宴を催す等、誠に満洲に相応しい春の情緒であります。

私は何時も元氣浚測にて職務に精励してゐます。

昨今葉峯線と称する新設工事開工せられに方り、我等の職責も又負担多く、従て夜間勤務等の著しくなりしも、文字通り熱河線自警員の責務には非ずやと、只管任務遂行に精励して居ります。此の葉峯線は葉柏寿より赤峯に通ずる鉄道で、蒙古に連繫する重要線であります。従業員一同、完全と自重を期して施設中であります。

皆様も御承知の通り、帝国の将来は誠に該線の○○○ホ鈔尤もそれが為新設されたる線にして、某○○○が如何なる挙に出づると雖、先づ其の幣害なきもの信ぜられます。唯徒らに熱河開拓の一途に非ざるのみならず、今や紛擾問題として世界の注目を受くる。南北支、蒙古○○○等の問題と熱河線を総合して懸念する時、毫も吾人の想像するに難くないでせう。之に伴ひて熱河省の發展は、又実に驚くものあり。首都承德の如き、昨年私等が攻略。当時は人口僅七八千なりしが、今は実に二万の多数に上

つてゐます。其の外、邦人の在住二千余。当凌源すら満人一万六千から邦人実に二千有余、熱河一とも称せられ、其の發展振りたるや誠に大なるものにして、尚前途瞭遠にして益々發展の余地あり。五月一日よりは坂凌線も開通し、一日乗客も三百人の多きに達すと云はれてゐます。王道楽土の満洲帝国は、今や世界に誇り得る権利と帝国布設に達し、益々曙光に辿り一点の雲りだになき晴天の大満洲帝国とはなり。それに住む我々邦人の喜悅なる事よ。

願はくは第二の日本として吾人の御力添えを切望致します。

目下警備区域変更と本部移動の為、執務其他に忙殺されてゐます。

昨夜十一時前就寝せる事なく、実に眠いです。

自警員其の者は殆ど楽なものです、私など庶務の庶に置かれて相当に苦しみます。

独立と違つて総てが満鉄本社転届ですので、

事務多忙です。

詳細にも申上げず、之から第一、二、三信の

要領にて御報します。

どうぞ御皆様御壮健にて。 高橋 徳 松

高橋 峰 次 郎 殿

(昭和九年春カ) ※封書と中身は別か。

38 【書簡】

岩手県和賀郡藤根村

高橋 峰 次 郎 殿

【封書裏】

満洲熱河省

凌源満鉄自警隊本部

高橋 徳 松

【本文】

書中御見舞申上候

天上の意を体し、専ら軍人分会、或ひは村発展の為に御精励ある分会  
長並に各位に対し、深甚の謝意と満腔の敬意を表します。

昭和九年盛夏 満洲熱河遼源満鉄自警隊

本部 高橋 徳 松

39 【はがき表】

岩手県和賀郡

藤根村藤根

高橋 峯 次 郎 様

遼源ニテ

高橋 徳 松

【はがき裏】

御葉書ありがたう存しました。

今回の行賞に際しては、衷心感激して居ります。

次に書籍どんな方面のがい、やらわかりませんが、百般を載せたのだらうと存じますけど、此方より内地の方の店に却てい、奴がある筈です。

満日年鑑を送りましたから、よくお調べ下さい。悪かつたら詳しく教へて下さいまし。新聞なども御参考にと存じ、私の見残りですが毎々送る事にします。ではどうぞ。

(昭和九年)

40 【はがき表】

岩手縣和賀郡

藤根村藤根

高橋 峯 次 郎 様

満洲熱河省遼源縣

遼源満鉄自警隊本部

高橋 徳 松

【はがき裏】

長い間御無沙汰致しました。思い乍ら遂色々から取紛れ、失礼申して居ります。

先生には益々御健在の様に存じまして、満州の一隅で喜び申してゐる次第です。毎度戦友ありがたう存じます。

別段郷里には変化もない様ですが、目下全国的にセンセイションを巻起してゐる東北地方の凶作は、此の満州にも之が救済方法が喚ばれるに至りました。薄給とは申せ、私等はこうして先づ職に就き、日本の立派な米を食糧として満腹する時、欠食児童等の憂を見聞するに当り、涙なしには居られません。

如何に恵まれぬ東北地方かと、同志間に何時も涙ぐまれて居ます。

目下各地で義捐金募集中にて、東北出身者は何れも薄給より應募しつつ、ある様に見受けまます。

村では今年入営者多数です。非常時日本に在りて国家の為入営するは、誠に荣誉であります。

過日ハイラルの菊池喜代三君より突然便りがありました。一生懸命やつてるさうです。及川氏も健在の由。目と鼻の近きに在り乍ら、仲々会へる機会がありません。

(昭和九年カ)

41 【はがき表】

岩手縣和賀郡

藤根村  
高橋 峯 次郎 様

凌源満鉄自警隊

本部内

高橋 徳 松

【はがき裏】

何時も変わらぬ御厚志に対し（以下、欠損）  
御健勝に涉らせらる、様拝察致しまして、遠くから御喜び申し上げます。  
満州智識のみは幾何知得致しませんが、内地の様子も解りません  
処に、郷土の新聞を御送り下されまして、申上る言葉も知りません。  
そろ／＼と忙かしくなつて来ます。  
満州の空気も相変わらず、唯皇帝を載き益々発展せん現況の喜び丈です。  
七師団渡満と同時に師団の凱旋、□言ひ難い徒然さを感じます。兄がゐ  
るにも拘不、矢張り果がい、もの、様であります。

（昭和九年カ）

42 【はがき表】

岩手縣和賀郡藤根村

後藤

高橋 峯 次郎 殿

【はがき裏】

謹 賀 新 年

満州国建国の第四年を迎へ更正の

満州より新春の御喜びを申し上げます

（昭和十年）  
一月元日

満州国熱河省凌源

満鐵自警隊本部

高橋 徳 松

43 【はがき表】

岩手県和賀郡

藤根村

高橋 峯 次郎 様

【はがき裏 ※印刷】

暑中御伺申上ります  
序に近況を申述べます。  
四年目の熱河の夏を迎へました。今年当初よりずっと錦縣に勤務して  
居ります。雨量も前年よりずっと少く、暑氣一層酷しく、紫外光線の  
強い勢が赤銅色に焦げて頗る元氣であります。  
昭和十年七月盛夏

錦州省錦縣

錦州満鉄建設事務所

高橋 徳 松

44 【書簡】

岩手縣和賀郡藤根村

高橋 峯 次郎 殿

【封筒裏】

奉天北陵御花園鑛路学院警務科

高橋 徳 松

（昭和十一年）  
一月二十四日

【本文】

拝啓

新春を賀し奉ると共に、御見捨なき御指導を御懇願致します。



何れ御返事に預りたいと思ひます。

それから学校の教育資料となるべき支那小学校、女学校、中学校等の参考品は熱河討伐に行く前日、即ち八年二月十九日に錦洲の局から私の実父（弟等の参考として）と藤根小学校宛送つてあります。学校からは届いた返事もなかつた様に思ひますが、私が知つてる先生もゐない様でしたから、或ひは熱河討伐間故、返事を出されても私の手に入らなかつたのかも知れません。

兎に角どの程度迄なるや、御一報相願はし度。実は先生、私も除隊後何の因果か体が非常に弱りまして、苦しい時があります。殊に左肩部の盲管創が弾があるために、天候の悪い時は歩く様な氣（が脱カ）しますので、少しは書いてもいゝと思ひます。何だか未短かい様で、笑はないて下さい。では各位の御健奮を祈ります。

一月二十三日夜十二時二十分終る。

先生

高橋 徳 松

45 【はがき表】

岩手縣和賀郡

藤根村

高橋 峯 次 郎 様

奉天鎮路学院

警務科

高橋 徳 松

【はがき裏】

新しき昭和十一年の春を迎へまして御喜び申上げます。  
遂忙しさに紛れて御年詞も申上げませず失礼し  
御手紙拝見仕り、委細承知致しました。

それ程青少年の為に御参考になるとすれば、作製して送ります。

唯、目下文字通り業務に忙殺されてゐるのみならず、学生の身分として仲々暇なく、三月上旬に退所しますから、遅くとも四月迄には送りません。

回数も多きに從て記事も少くないと思ひます。そして日記其他の参考書類も全部自宅にありますので、どうしても四月頃になると思ひますから、不悪

御諒承下され度、願上げます。

（昭和十一年）

46 【はがき表】

岩手縣和賀郡藤根村

藤根青年学校

職員 御 一 同 様

【はがき裏】

暑 中 御 見 舞 申 上 候

御無沙汰御寛容願上候

愚生無異鏡道使命の重責に微力を

致しつ、遂次国鏡起業の完璧を期し

つ、あり

昭和十一年盛夏

赤峯警務段

高橋 徳 松

47 【はがき表】

岩手縣和賀郡

藤根村後藤

高橋 峯 次 郎 様

【はがき裏】

恭賀 新年

昭和十二年元旦

満洲国熱河省赤峰警務段

高橋 徳松

48 【書簡】

岩手縣和賀郡

藤根村後藤

高橋 峰次郎様

満洲大凌河驛にて

高橋 徳松

【本文】

冠省

酷暑愈々凌き難き候。

各位益々の御壮健の事と存し上げます。

而して益々健全なる村自治体の建設に邁進せらる、各位の御辛勞に對

し、遠く墳墓の地を離る、我々の最も感謝する所であります。

殊に非常時は正に時局を孕んで經濟に政治に軍事に、悉く我が日本を中

心に世界の動きは或は直接に、或は間接に我々に働き掛く。

此の秋に方りても我が藤根村は何等動するなく、益々農村開發、福祉増

進に皆様團結せられ、断全群を抜く将来性を耳にし、我が帝國に生れた

るを喜ぶと共に、我が傳統農村藤根村に生れたるを今□□に諸手を挙げ

て喜んでみます。

各種団体は團結の下に時局に處する其の意氣あるを耳にするにつけ、

益々力強さを感じるものであります。

亦最近渡滿者の多きに至りたるものも、殖民地開拓の意志と經濟意識に

富み、併せて満洲国建国の意義に則り、亦精神を遵奉したるものと存じ  
まして、将来に於ける日滿親墨<sup>睦</sup>は勿論、之に依りて一徳一心の實を挙ぐ  
るは火を見るよりも明かならんと考へられます。我が村の青年の渡滿に  
依りてすら、日滿經濟プロックは他に動するなからんと考へられます。  
北滿方面に於ける移民等も、岩手縣人の比較的多く、岩手村の建設も頗  
る有望視されてゐるでせう。匪賊の匪賊等は今更問題にするものではあ  
りませぬ。古の匪賊と今の匪賊とは全く趣を異にしてゐて、何等恐る、  
に足らぬ三下奴と同じです。

言は、内地のコソ泥なのです。先づ集團匪であれば、他国の間諜行為に  
懐を暖める奴か、亦是思想を背景としたものに過ぎない。つまり匪賊と  
は名のつかぬやつであります。

国内の治安は先づ確立されたものと言はねばならず、よしんば一二の  
斯る者ありとしても、満洲の国法は之を嚴重處分の最重罰として取扱つ  
てゐるから、我々も度々之等を死刑にした事があり、現在益々其の度が  
加重されて来てゐます。

之に依りて、どん／＼開拓意識の旺盛と満洲認識を深められる、様、青  
年諸兄は須らく渡滿せられよ。で私達は官吏を希望するより百姓を志せ  
と言ひます。蝶ネクタイでもめた洋服を着た者のみが満洲開拓でもなけ  
れば、満洲国要人でもない。却つて家も村も失墜させる奴等に決つてゐ  
るのです。

どうも駄弁を勞しました。實は昨日村の真友を留守中の家族より送付し  
て来たので、早速拝見。村の發展に歓喜したものですから、鍊橋監視、  
対空監視の線より時局のために出勤中手記しました。

私も大元氣です。昨年三月より一般鉄道沿線農村（鍊道愛護林）の宣撫  
を担当してゐましたが、本年六月庶務係を担当する事になり一ヶ月勤務  
してゐましたが、軍の命令に依り私は新式高射重機を携へて、南滿即ち  
<sup>関東軍</sup>北支との接壤地帯鍊道術工物の掩護のため、七月初旬出勤しました。目

下各所に転々中です。

北支事件も御承知の通り、豊台附近<sup>(石カ)</sup>に於ける駐屯軍夜間演習に対し、二十九軍の不法射撃に端を発し、其の後梅澤、何應欽協定の実現空しく、益々南京政府の反満抗日テロと共に其の非法は恐らく我が日満両国の自衛上、既定方針の一途あるのみと解せられます。

蒋介石等は夫も喰ぬです。ソ聯・英が何ですか。怖けづいて遠くから烏の鳴き声を立てるばかりです。英支経済が如何の、地中海が言々とか言つたつて、事実は恐いのみでせう。ソ聯が何とか言つたつて、最近の幹□□島事件に依る艦船撃沈問題が言々と威張るけれど結局何の祟りもあらばこそ、国内反スターリン要人射殺事件もやっぱり彼の自己保身と相俟ツテ、聡ての□、□防禦手段に過ぎないでせう。

昔の支那人は、我等を称して洋鬼子<sup>ヤンクイ</sup>とか。今尚時に耳にす。東洋の鬼とかの意。其の通り。鬼の意は悪い事の鬼でなく、馬鹿に強く向ふ所敵ないものだから、鬼と言つたものらしいです。

北支からは各種団体の間諜が入満した様で、随分後方攪乱を企て、ある様ですが、挙げられる、事一網打尽です。

宋哲元も身振ひしてゐるらしい。はさまれて□汝耕氏は日本婦人を本妻にしてゐる関係か、相当ガツチリやつてござるらしいです。宋氏は気が小さい人ですね。体は大きいのに、精神決めるのに一年位はかゝるさうです。

仲々即座に頭を振らないものらしいです。いや、どうも長い乱筆を致しました。

及川君は五月結婚し、十日ばかり私宅にゐまして郷里の話に花でした。若き婦人と共に多□にゐるでせう。

どうぞ皆様益々御奮斗の程、お願い致します。

高橋 峯 次 郎 様

旅の途 乱筆にて  
高橋 徳 松

(昭和十二年七月カ)

#### 49 【断簡?】

之をやつて下さい。又考えて後でよい方法でやりませう。

長の音信打絶て 村の有志の立腹は

平に御免なされよ

○思ひ起せば昨年の 去<sup>サ</sup>ぬる十と一月の

月も半ばの十四日 思ひ出深き出征日

星霜正に夢なるや

○独立守備の軍曹殿 錦洲師団の鳩通信

陣中勤務の鉄 兜 熱河の情況如何がやと

義洲の柳如何にせん

○南洋航路の藤枝君 村の犠牲者菊池君

かくも名譽の人達の 出せる村こそ誉なれ

出せる村こそ栄<sup>サカ</sup>へべし

○しかるに眠<sup>ユ</sup>る我が村の 脳<sup>ノウ</sup>む心の如何にせん

この熱<sup>ネツ</sup>この誠<sup>マコト</sup>一例を 左<sup>ヒダリ</sup>に掲<sup>カ</sup>げて参考の

一般民に供せられん

三十円の封入で 暖国何等脳みなく

暮す乙女に想像も つかぬ寒さの○○○に

戦ひ奮ふもの、ふに 上げて下さい僅かでも

妾等田舎の娘子の 泣ける涙心の又泣ける

乙女の心を誰や知る 乙女の感を知つて、よ

知つて下されこの胸と

南洋の戦友思はれよ 独り自分の為ならず

生きる心の美はしさ 村の誉で誰か知る

目覚む村こそ美しき



やがては日本の天子様

○五分に三分の糸巻イトマキは 娘のタゲルその次第

ハゲル心の健気なれ 五分に足りない蟻でさへ

互に貯めて後の世の 働く心の健気なれ

○況して人間そのものが 唯凡々と光明を

暮し行くこそ恥なるぞ 教育其の他資料費が

惜しくば止めよ主領椅子

作者は稲葉の床の下 静かに祈る大明神

だんぐよく書いて出しますから

極端かも知れませんが、では御壮健で

註(一) 内年月日は翻刻者による。

(仙台市博物館、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇〇二年四月一〇日受理、二〇〇二年六月二十八日審査終了)

高橋徳松氏の軍事郵便一覽表

No	消印(年月日)	日付(年月日)	発信時の所屬	形式	内容
1	六・一・?	六・一・一〇	弘前歩兵第三二聯隊機関銃隊第五班	はがき	入営御礼。入隊通知。「一意専心軍務に勉勵する覚悟」。
2	六・一・一一	六・一・一〇	弘前歩兵第三一聯隊機関銃隊第五班	はがき	同 右
3	六・一・一二		弘前歩兵三ノ五	はがき	兵営生活。青訓検定。「仲々猛烈競争デ辛イ所モアリマス」。
4	六・一・一二		弘前歩兵三ノ五	はがき	兵営生活(学科試験、射撃、内務検査など)。高三(高橋三太郎)、小国(小松国次郎)、菊仁(菊池仁兵衛)に会う。及長(及川長作)には逢わず。
5	六・四・一三		(弘前) 歩三一	はがき	兵営報告(銃隊査閲・学科試験)。「別条なく軍務に精勵」。
6	六・七・一二			はがき	精勵章付与される。銃剣術の番付は「大関」。「郷里の土地を踏みたい心地」。
7	六・一・三〇			はがき	出征見送り御礼。満州派遣、奉天着。「敵の密偵出沒」早く出陣を待つ。
8	六・一・二九		奉天歩三一第二大隊機関銃中隊	はがき	藤根村軍人分会、同青年団、同訓練所、同小学校宛。戦況報告「頗る元氣旺盛、勇氣潑刺」。
9	六・一・二二		於チ、ハル奉天歩三一第二機関銃中隊	はがき	満州饒陽河の戦闘「馬賊のチャンコロさんが出沒」。支那主義批判。「真友見たくなった」。
10	六・一・二四	六・一・二三	満州派遣軍歩兵三一聯隊第二機関銃中隊	封書	釜山上陸、奉天着、宿営、錦州攻撃。初めての戦闘に高揚する意識。「真友」。
11	七・一・一九		満州派遣軍歩兵第三一聯隊機関銃隊	封書	「真友」お礼。近況報告。及川、千葉(徳右衛門)両君と「真友」を読む。郵便の検閲。
12	七・一・二六		満州歩三一第二機	はがき	「真友」お礼。及川君と逢う。
13	七・七・三	七・七・三	満州歩三一第三ノキ	封書	近況報告。錦州部隊の戦死者。
14	七・八・九		錦州機関銃隊	はがき	近況報告。義州警備。及川、千葉君と逢う。政次郎君(高橋)はお気の毒。
15	七・八・二四		満州派遣歩三一聯隊機関銃隊	封書	近況報告。軍隊の食事。お盆の赤飯。石川、千葉、小原、及川君らと通信。
17	七・九・七		満州派兵三ノ一聯隊機関銃隊	はがき	演習招集者、中進級者への祝福。青年会館設置を祝す。「真友」送れ。千葉、及川君の消息。
17	七・一〇・四		満州派遣軍歩三一聯隊機関銃隊	はがき	及川君も元氣。政次郎君の疾病除隊は残念。
18	七・一二・五	七・一二・五	満州派遣歩三一聯隊機関銃隊	はがき	新聞は到着、栗は未着。
19	八・一・一	八・一・一	満州派遣第八師団歩兵三一聯隊機関銃隊	はがき	年賀状。「益々國威の隆昌を期し、粉骨碎身各位の期待に副う覚悟」。
20	八・一・一六		於満州	はがき	「山海関戦に参加、異状無之」。
21	八・二・二二		満派歩三一第二機関銃中隊	はがき	第二機関銃隊へ再編入。斎藤庄右衛門君と会う。
22	八・二・二二		満派歩三一第二機関銃中隊	はがき	「其地へ廿日出動」「勝つか死か」「最後の今日を待たれよ」。
23	八・三・一二	八・三・八	於凌源	はがき	「〇〇攻撃に参加、異状ナシ。乞フ御安神」。
24	八・三・一三	八・三・(一一)	満派歩三一ノキ	封書	熱河朝陽寺へ向かう。第二分隊長を拜命。初年兵を激励し行軍。分隊長の責務と苦勞。
25	八・三・二四	八・三・二三		はがき	「異状アリマセン」。
26	八・四・七	八・四・五	満派歩兵第三二MG隊	封書	界嶺口に向かう。「行け行け、行く所迄行くんだ。徳松には神様がついている」。
27	八・五・二	八・五・二	満州国凌源東軍臨時第二野戦病院外科	はがき	「無事奮闘中、熱河省内を端から端までルンペンの様」※「五月十四日」の書き込みあり。
28	(八)	(八)・五	派歩三一第二機	封書	五月一四日の戦闘で負傷、入院。近く退院。負傷及び戦闘の近況報告。
29	八・七・		派歩三一第二機	封書	戦闘地図二葉あり。
30	八・八・二			はがき	「長らく御無沙汰」。目下古北口の警備。武藤君の薨去を悼む。
31	八・八・一五		満州派歩三一ノ機	はがき	「支那の色々」を執筆中。参考のため後日送る。
32	八・九・八		満州歩三一ノ機	はがき	稲葉農家組合より送ってくる新聞のこと。斎藤、千葉、及川君の消息。

33	八・九・一二	八・九・三一	派歩三一第二ノ機	はがき◎	和賀新聞と「真友」のお礼。「同郷出身者何れも壮健」。
34	八・一〇・六	八・九・三一	満州派遣軍歩兵三一聯隊第二機関銃中隊	封書◎	停戦協定後の近況報告。宋振武軍との対峙。
35	(八)・一一・		満州国派歩三一ⅡMG	封書◎	和賀新聞のお礼。除隊は二月下旬の予定。除隊後も留満して満鉄入社に決す。及川君も同じ帰郷したいが再渡満は旅費がかかる。留満者は和賀郡出身者多し。
36	(九)・一・		満州国熱河線凌源満鉄自警隊本部	封書	歩兵伍長で(八・一二・二六)。満鉄自警隊に勤務。
37	・一・一八	一七	満派歩三一乗馬隊	封書◎	「真友」に郷土の新報。満州の春。熱河線自警員の責務。※封筒(昭和八年カ)と中身(昭和九年春カ)が別か。
38	九・八・八	九・盛夏	満州熱河凌源満鉄自警隊本部	封書	暑中見舞い。
39	九・一・一八		凌源ニテ	はがき	満州から書籍・新聞を郷里へ送る。
40	?・二六	(九年カ)	満州熱河省凌源縣凌源満鉄自警隊本部	はがき	「戦(真?)友」お礼。東北地方の凶作を憂う。目下義捐金募集中。菊地喜代三君より便り及川君健在。
41	? (九年カ)		凌源満鉄自警隊本部内	はがき	「郷土の新報」への御礼。「満州皇帝を戴き益々発展せん」。
42	一〇・一・一	一〇・一・一	満州国熱河省凌源満鉄自警隊本部	はがき	年賀状。
43	一〇・	一〇・七・	錦州省錦縣錦州満鉄建設事務所	はがき	暑中見舞い。
44	(二一)・一・二八	一・二四	奉天北陵御花園鐵路学院警務科	封書	「村誌」への戦歴執筆について。自ら編輯したパンフレットについて。渡満後の行動表。
45	(二一)・二・一〇		奉天鐵路学院警務科	はがき	戦歴執筆依頼への返事。「青少年の為に参考になるとすれば作成して送る。四月まで」。
46	(二一)・八・	一一・盛夏	赤峯警務段	はがき	暑中見舞い。
47	(二一)・一・一	一二・一・一	満州国熱河省赤峯警務段	はがき	年賀状。
48	(二二)・七・二八		満州大凌河駅にて	封書	満州開拓の呼びかけ。「青年諸兄は須らく渡満せられよ」。満州の景況。「真友」お礼。及川君、結婚。
49		(七年カ)			詩草稿(断簡)。

(註) ◎は「軍事郵便」の判あり